

日中同形語の意味相違についての考察

(A study on the Differences Between the Homographs in Japanese and Chinese)

莊 巖

日本語と中国語が異なった系統の言語でありながら、同じく漢字を使用している。中国と日本は昔から語彙の交流が盛んであり、語彙の相互借用が複雑な様相を呈している。そのため、日本語と中国語との間に、たくさんの同形語が生まれた。それらの同形語の存在は相互のコミュニケーションに大きな利点をもたらした同時に、大きな「落とし穴」にもなっている。なぜなら、外見（漢字表記）が同じであるとはいえ、意味と用法においてずれが生じているものが多数存在しているからである。

本稿は、これらの意味・用法において相違が存在する同形語を考察の対象とし、その相違の実態とおよびそれをもたらす原因について、四章にわたって考察を行う。

第一章では、主に同形語の認定、同形語の成り立ちおよび同形語に関する先行研究を紹介する。「同形語」といえば、形が同じであることは一番の前提となっているはずであるが、実際、漢字の字形について、日本と中国ではそれぞれ幾たびの文字改革が行われてきた結果、両者が必ずしも一致しているとはかぎらないものが多い。ただ、それぞれ昔の字体に戻して考えれば、同じ語となるから、字体が同じであるというより、語構成が同じであることは同形語のいわれである。そして、同形語の成り立ちにおいては、明治維新を大きな境に、その前は古代の高い文明を持っている中国から日本へ、その後は、近代の西洋化を一步リードした日本から中国へ大量の語彙の流入があったのである。後者の日本人の手による造語の中、中国語の古典語に新しい意味を与えたり、英華辞典の訳語を修正したりしたことによってできたものもたくさんあるように、日中の語彙における相互借用が複雑であった。これらの同形語は違う使用環境の中で、年月とともに、それぞれにおいて意味の変化が生じることが多い。また、同形語の先行研究については、同形語の全体的な状況に関するもの（量的な統計を中心に）、意味の対照記述に関するもの、「文法、文体、評価」など語の意味の周辺に関するものがあつた。同形語研究の問題点としては、語の意味記述の不完全さと、意味・用法の相違に関係するいくつかの側面を合わせた全体像へのアプローチに欠けているところだと思われる。

第二章では、同形語の意味的対応とそれに基づく分類についてのべる。意味的対応を考えるにあたって、まず、語の意味を対象的意味と周辺の意味とにわけると。対象的意味は一般的に概念的意味とも呼ばれており、語の意味の一番中核的な部分である。周辺の意味は文法的意義特徴、文体的意義特徴、評価的意義特徴から構成するものと考え、対象的意味とともに語の全体的な意味に貢献する。同形語を分類する際、対象的意味と周辺の意味の両方から考慮しなければならない。ただ、語の意味の切れ目に対し、しばしば明確な一線

を引きにくい場合もあるから、語の具体的な用法ともあわせて考える必要がある。

第三章では、主に類義同形語における意味・用法の相違を考察する。類義同形語の意味・用法における相違を作り出す要因は、周辺の意味におけるかたよりと対象の意味におけるかたよりと、大きく二つに分けられる。周辺の意味のかたよりについては、文法的特徴、文体的特徴、評価的特徴という三つの側面から、日中それぞれどういう違いがあるのか、その違いはどのように対象の意味に働きかけるかを説明する。一方、対象の意味のかたよりは、主に日中同形語における意味領域の差、言い換えれば、それぞれどういう対象語と共起するののかのことである。中で、具体・抽象の差が対象の意味のかたよりとして、一番よく現われるが、そのほかにも、語によって、いろいろな形が存在する。ただ、ここでいう対象の意味のかたよりは、周辺の意味の働きかけによって生じたものではなく、対象の意味自身に存在するものである。

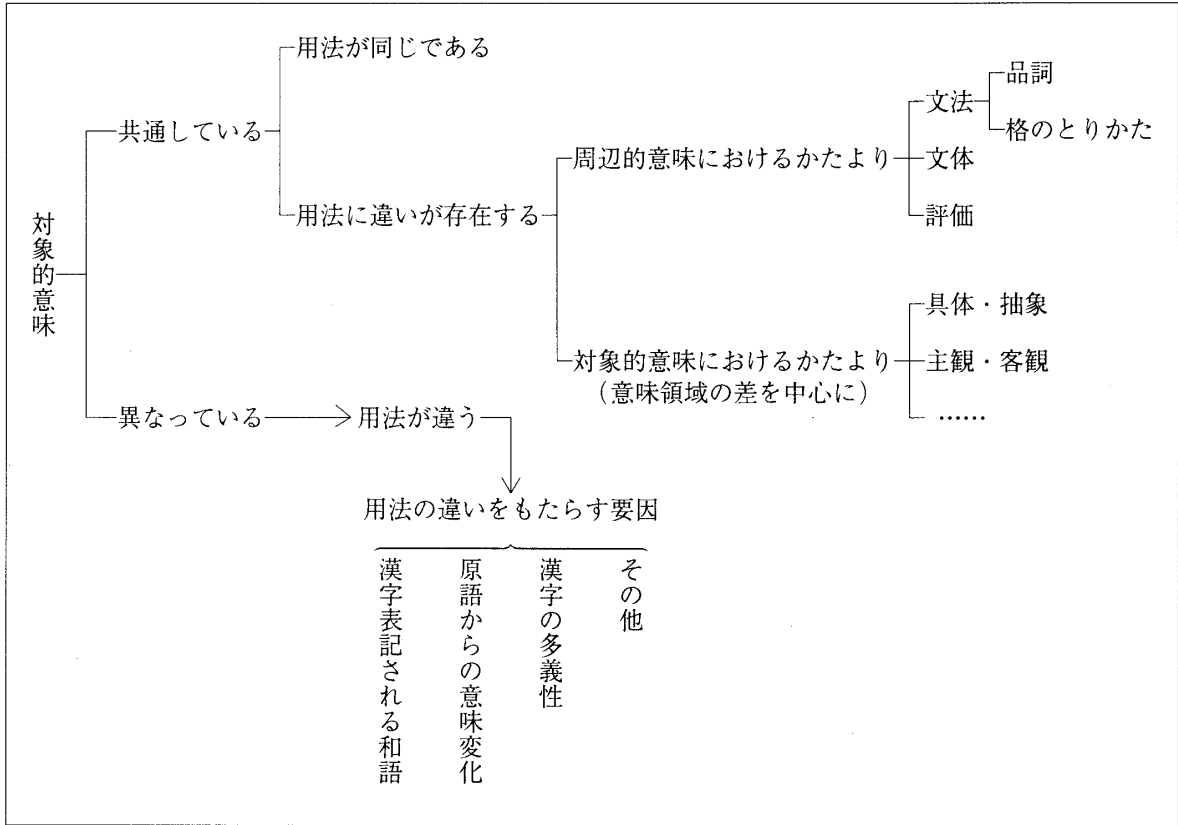
第四章では、主に異義同形語における意味・用法の相違を考察する。異義同形語には、まったく意味が違うものと、一部の意味が違うものと大きく二種類に分けられる。さらに、一部の意味が違うものには中国語は独自の意味をもっているもの、日本語は独自の意味を持っているもの、それぞれ独自の意味をもっているものと細分することができる。異義同形語について、最初から対象の意味が異なっているから、周辺の意味や具体的な用法の違いが二次的なものとなる。そのため、対象の意味の違いそのものを把握することはもちろんのこと、対象の意味の違いをもたらす原因に注目することも異義同形語への理解に貢献すると思う。本章では、その原因に注目しながら、意味相違の記述を重ねて考察を進める。そして、訓読み和語および和製漢語の存在、原語からの意味変化、漢字の多義性との三つは、異義同形語を作り出す主な原因とする。

日中同形語における意味・用法の相違の実態とその違いをもたらす原因について考察した。日中同形語の対照研究は、双方の学習者を対象とする日本語教育・中国語教育に大いに役に立つことは言うまでもなく、より正確な語積と用法を提示してくれる、日中・中日辞書の編纂或いは修訂にも必要不可欠なものである。

以上の内容を、添付「意味・用法と分類に関する整理図」(別紙I)にまとめた。

別紙 I

意味・用法と分類に関する整理図



<具体例>

深刻 (評価性が違う同形語)

日本語の「深刻」の常用例をあげると、「深刻な顔、深刻な悩み、深刻な住宅問題、深刻な対立」などで、いずれも好ましくない内容をもつものである。一方、中国語の<深刻>は、「深い、心に深く刻み込まれている」という、たいへんよい意味に使われている。例えば、

- <留下深刻的印象> 忘れがたい印象を残した。
- <受到了深刻的教育> 心に残る教育を受けた。
- <有了深刻的体会> 身にしみる体験を持った。

のようなものが代表例である。

「深刻」のほか、中国語が日本語より評価性が高いものとして、「方便、増長、小心、巧妙、謹慎、重大」などがある。

応酬 (対象的意味がまったく異なっている同形語)

“応酬”は古典語では「交際する、応対する」の意味であり、そこから「手紙に返事す

る」ということにも使われていた。現代中国語の〈応酬〉は、古典語の意味を保持しながら、文体的には日常なことばとなっている。

- ・不善応酬。(客扱いが下手である、交際が下手である。)
- ・他の応酬コワ広。(彼は交際が広い。)

さらに、「交際する」の意味から「(顔を出さなければならない) 付き合い、私的な宴会」という名詞的用法も生み出された。

- ・他コワ忙、工作時間之外的応酬也不少。(彼はとても忙しく、勤務時間以外の付き合いも少なくない。)

いずれにしても、古典語の「交際する」から離れてはいないのである。しかし、日本人がもし中国人に「今晚“応酬”がある」と言われたらちょっとびっくりするに違いない。なぜなら、日本語で「応酬」は「向こうが言った(した)ことに対して、こちらも負けずにやり返す」という、けんか腰になっていそうな意味である。

- ・攻撃を受けたら直ちに応酬せよ。
- ・北方領土の帰属をめぐる日ソ両政府間の応酬が続けられてゆくなかで、

アメリカ大統領選挙の真っ最中に、「ゴア、ブッシュ、電話で応酬」という新聞記事の見出しを見た中国人は(もちろん、漢字には強いが、日本語は不十分な人を言うのである)、お互いに親切を装って電話で挨拶したぐらいのことは記事になるほどのものではないと思うかもしれない。